

# 論説文の教材研究

——「ロダンの遺言」の場合——

野 宗 睦 夫

## 一 指導目標をどこにおくか

1 『美』の祭司となるうと願う若い人達よ、ここに永い体験の要約を見出すことは、おそらく貴方がたを喜ばせるであろう。

2 貴方がたの先人である諸大家たちを、心傾けて愛したまえ。

「ロダンの言葉」(ポール・グセル、古川達雄訳、角川文庫)の  
A 遺言Vにある最初と次の文である。番号は便宜上ほどこした。

この文の中にA遺言Vの教材の特異性が集約的に示されている。

すなわち

A、制作者の芸術論であること。

B、短い文章の集まったものであること。

C、翻訳文であること。

きわめて基本的なことであるが、私がともすると、なおざりにしやすいものとして、教材の学習指導目標を明確にしないままに教室

に出ることがあげられる。この学習指導目標を明確にしないのに二つの場合が考えられる。一つは教材研究をくわしくやって欲張りすぎた結果、目標が明確になっていない場合であり、一つは教材研究不足で、目標が概念的な場合である。教材の指導目標を明確にすることは現在の私の一つの課題となっている。その教材でなければとらえることのできないものをどういうふうにしてとらえるか、対象をとらえる方法と対象の特異性、これがその教材の指導目標である。

5. A 遺言Vの場合、指導目標はどうなるであろうか。

A 制作者の芸術論であること。

1 において「『美』の祭司」といい、「体験の要約」といっている。芸術論であるからには作品を念頭において考えなければいけない。芸術論教材の扱いにくさは、その二重構造にある。この教材の場合、彫刻だけによけい面倒である。立体を平面で鑑賞する場合がほとんどだからである。写真から立体を想像する場合がほとんど

だからである。

制作者の「体験の要約」であるので、そこに単なる平凡な人間ではない、自分の仕事と戦ってきた人間の歩みを見いだすことができよう。この点で制作者の芸術論は、すぐれた人間の人生論となりうる。二重構造を持った扱いにくさは、人生論の面で補われうらうと思つ。

この点がA遺言Vを扱う場合の大事な点であろう。従来の国語甲の教科書に採用され、また三十八年改訂の現代国語にも採用されている原因もここにあらう。

ロダンの芸術論を理解するだけではなくて、われわれの人生を考へる手がかりとしなければ、この教材は生きてこない。「『美』の祭司」は「人生の祭司」と同義語とならねばならない。

B 短かい文章の集まったものであること。

古川訳によれば、十八の部分からできている。もっとも短かい

17 芸術はさらに又一つの立派な誠実の教訓である。

のようなものをはじめとして、もっとも長い

5 貴方がた、彫刻家たちよ、深さの感覚を自分自身に強化したまえ。(中略) 輪廓を左右するものは凹凸なのである。

にしても七つの小段落で九百字に満たない。

こうした短かい文章の集まったものは統一的にとらえることがむずかしく、つい、ばらばらのままでとらえがちである。内容面では

各文章間のつながりがとらえにくく、形式面では、各文章に共通してみられる表現の特色がとらえにくい。

1の「永い体験の要約」が2で「諸大家たちを、心傾けて愛したまえ」と命令表現をとっているが、1と2とはどういう関係があるのか。また1と、17の「誠実な教訓である」という断定表現とはどういう関係があるのか。各文章を独立したものとして受けとりはするが、つながりを考えることはむずかしくもあり、またみのがしやすい。質とか、作者とかのちがったものによせあつめなければいざ知らず、このA遺言Vのようなものは統一的にとらえることが必要だと思ふ。

C 翻訳文であること。

1 「美」の奉仕者でありたいと思ふ青年たちよ、君たちはここに、ながいあいだの経験があらまし書きしるされているのを見、あるいは喜ばしく思ふかもしれない。

2 君たちに先だった大家たちを、神の前にあるのと同じ心で愛してほしい。

おなじA遺言Vのはじめの文章であるが、この文章は古川訳とはひどくちがった感じを与える。「ロダンに聞く」(ポール・クセル、内藤濯訳、東京創元社、S 36・3)から引用したものである。

A遺言Vの談話の集録者に関しても「これまでポール・クセルとかポール・ゲセルとか言われてきたようだが、訳者が然るべき人に訳したところでは、ポール・クセルというのが正しいようである。」

(同書、訳者のことは、P7)という意見がでている。

「祭司」と「奉仕者」、「なるうと願う」と「ありたいと思う」、「おそらく……喜ばせるであろう」と「あるいは喜ばしく思うかも知れない」、「心傾けて」と「神の前にあるのと同じ心で」、「愛したまえ」と「愛してほしい」、と大なり小なり翻訳された二つの文のあいだには意味のちがいがあつた。こうなると、表現を問題とすることは、ロダンの表現ではなくて、訳者の表現を問題とすることになる。「愛したまえ」と「愛してほしい」との表現のあいだには、先人に対するロダンの態度を受けとる場合、ちがいがあつた。翻訳の差は、作者への迫り方に差を作る。さらに翻訳のちがいは、この人遺言Vの文章のわけ方もちがつたものとしてゐる。

古川訳によれば十八の部分からできている。ところが内藤訳によれば二十一の部分からできている。そのふたつのちがいをみると、四つの部分がちがっている。その中三つは古川訳のひとつの部分をつたつにわたつたものであり、残るひとつのちがいは、古川訳の後半と次の部分をいっしょにしてゐるものである。

表現のちがいがいい、構成のちがいがいい、わたくしたちは、翻訳されたものにししかあたることはできないのだから、であつたものを教材として考えてゆかなければならぬ。

以上の特異性は指導目標を設定する場合にどう関係してくるであらうか。

Aの特異性からは

イ、ロダンのものの見方、考え方を理解する。

ロ、ロダンのものの見方、考え方から、自分のものの見方、考

え方を反省する。

という指導目標が生まれる。ロダンのこのべてゐることは、わたくしたちの人生を考えるのに参考になることが多い。高校生が人生を考える教材としては適當なものである。単にイだけではなく、ロをふくめた指導目標とすべきであらう。

Bの特異性からは

イ、各文章の内容を的確にとらえる。

ロ、全体の構成をとらえる。

という指導目標が生まれる。イの方は論説文の読解指導となる。論説文の読解指導なので、この教材のおかれてゐる位置によつて、指導目標のおき方が変わつてこなければいけない。短かい文章だけに指導目標としてかけられる項目には苦心がある。ロはうっかりするとみのがしてしまふことである。

Cに関しては、ぜひとも必要な指導目標をひきだすこともないと思ふ。参考程度に翻訳を比較する学習活動ぐらゐしか予想できない。

Aからは内容面の指導目標がひきだされ、Bからは表現面の指導目標がひきだされたわけである。

## 二 本文をどう読みとるか

論説文の文の段階の指導事項として、わたくしは次のようなものを考へてゐる。

(1) 主語・述語

(2) 指示語

(3) 接続語

第一段階

(4) 同義語  
(5) 比喩・例証  
(6) 文末  
(7) 事実と意見

第二段階

これらがロダンの人遺言Vではどこで指導できるであろうか。これを古川訳にしたがって一覧表にしてみると、次の通りである。(以下特にことわらない限り古川訳である。)

文章番号	主述	指示	接続	同義	比例	文末	事意
12			○			○	
11					○		
10					○		
9			○				
8						○	
7					○		
6						○	
5		○					
4		○				○	
3	○		○	○	○	○	
2						○	
1					○		

この中で指導の焦点をしぼるとすれば、比喩・文末などが適当であろう。

18	○								
17									
16		○							
15			○						
14				○					
13					○				

論説文読解の次の段階である

(8) 文と文との関係

(9) 主題文

(10) 要点

(11) 小段落と小段落との関係

第三段階 (段落の段階)

となると、1、2、6、17が(8) (11)は関係なく、8、9、10、11、13、が、(11)と関係がない。半数の文章が論説文の第三段階の読解を必要としない。これからみても、この人遺言Vが短かい文章の集まりであることがわかる。前記の1、2、6、8、9、10、11、13、17以外の文章が、

(13) 構成

(14) 要旨

(15) 要約

第四段階 (文章の段階)

の指導体系を行なうことができる。この入遺言Vは各文章の構成・要旨の上にさらに1-18の文章を通した構成をとらえなければならぬ。

3 ①フィアスの前に、またミケランジェロの前に、恭々しく腰をかがめたまえ。②前者の浄らかな静朗を、後者の激しい苦悩を崇めたまえ。③賛美はそれら高貴な精神に捧げらるべき芳淳の美酒である。

④併しながら貴方がたの先輩たちを模倣することは自戒されよ。⑤伝統を尊び、それが包蔵する永遠に豊饒なもの、すなわち『自然』の愛と誠実と——を見抜き得たまえ。⑥それが天才たちの二つの烈しい情熱的である。⑦いずれもみな『自然』を賛え、また決して偽ることがなかった。⑧かくの如く伝統は貴方がたに、それによって常套から逃れうる鍵を差出している。⑨不断に現実を参照するように貴方がたにすすめ、また如何なる師にも盲目に従うことを禁ずるものは、伝統それ自身なのである。

この二小段落九文の文章を教材研究の立場から読みとってみたい。

①恭々しく腰をかがめたまえ——命令の文末。②の「崇めたまえ」、③の「賛美」と同義語であり、それらが精神をあらわすのに比し、行動の表現をとった。

②①と同じく命令文末であり、フィアス→前者の浄らかな静朗、ミケランジェロ→後者の激しい苦悩、恭々しく腰をかがめたまえ→崇めたまえ、と考えれば、①の説明が②と考えられる。

④賛美①②の文末、すなわち述語が③では賛美に統一されて、主語となった。

③高貴な精神②の「浄らかな静朗」、「激しい苦悩」をまとめた語句である。

③芳淳の美酒②比喩である。「賛美は」の主語に対する述語であるので、賛美のもつ意義をのべたことがわかる。偽りのない、純粹な対し方の比喩であろう。

④併しながら②前の小段落全体をうける。賛美する態度をうけている。

④模倣②模倣と同義語として⑧の「常套」⑨の「盲目に従うこと」がある。

④自戒されよ②命令文末である。前の小段落の賛美から生まれやすい模倣をいませめた。

⑤伝統②模倣と対照的な語である。伝統→永遠に豊饒なもの↓『自然』の愛と誠実、とだんだんくわしくのべた。

⑥自然②ロマンは自然を「制作者の外部にあって制作の対象になるもの」の意味で使っている。

⑤見抜き得たまえ④の「自戒されよ」と対応する命令文末である。

⑥それ⑤の『自然』の愛と誠実

⑦讚え⑤の「愛」と同じ。

⑦偽ることがなかった⑤の「誠実」と同じ。

⑧かくの如く⑤⑥⑦をさしている。この文で、④模倣(②常套)と⑤伝統という対照的な語が交わることによってその関係がはっきりかとなった。

⑥不漸に現実を参照する⑥の「『自然』への愛と誠実」をもつて物を見る。

⑦すすめ⑦その次の「禁ずる」と対照。

この方法の教材研究はわたくしの場合、一番多い方法である。ごく短かい文章であるが教材研究をしてみれば、かなりの抵抗のある文章である。

14 わが極めて親愛な、かつ極めて偉大なウージェヌ・カリエール早くも我々から去っていった——は、彼の妻と兄弟等を描いて天才を示した。彼にとつて、至高であるためには母性愛を頌め讃えることで充分なのであった。大家とは、すべての人々が既に見た処を、彼等自身の眼で見つめる人達であり、他の人々には余りにも陳腐である物のもつ美を、認めることの出来る人達なのである。

悪しき芸術家たちはいつも他人の眼鏡をかける。

肝要なのは、感動していることであり、愛することであり、希望することであり、顛慄することであり、生きることなのである。芸術家たる以前に、人間であれ、真の雄辯は雄辯を嚙う、とパスカルは述べた。真の芸術は芸術を嚙う。私はここにウージェヌ・カリエールを例に挙げる。展覧会に於て、大多数の画幅は単に絵画であるのに過ぎない。だが彼のものは、その中にあって、生命にむかつて開かれた窓のようにも思われた。

この文章に対して、問題を作り、問題を解決することにより、内容を理解するという方法もある。

問一 (a)「他人のめがねをかける」の意味として 次のどれがよいか。

- 1 他人のめがねを借りて、物をはっきり見る。
- 2 他人にばかり頼って暮らす。
- 3 他人の見方にならつて物を見る。
- 4 他人の力を利用する。

問二 (b)「絵であるにすぎない」の意味として 次のどれがよいか。

- 1 平面的な絵であつて立体感に乏しい。
- 2 いかにも絵らしい絵であるにすぎない。
- 3 絵に作者の生命の脈動が感じられない。
- 4 絵の特色があまり表現されていない。

問三 (c)「その」は何をさしているか。

- 1 カリエールの絵
- 2 カリエールの絵
- 3 展覧会場に出品された絵画
- 4 展覧会場に出品した芸術家

問四 (d)「生命に向かつて開かれた窓」の意味として 次のどれがよいか。

- 1 それを通して人生を見せる作品。
- 2 人生を描いた絵画。
- 3 人生を明るくする絵画。
- 4 人生への出発点。

問五 次の文章の中で、作者のもつとも強調したいことはどの文に示されているか。その文を一文だけ抜きだせ。

こういう方法は、教室の緊張を保つためには効果的だと思ふが、

手間のかかるのも事実である。

15 △一小段落V①正しい批評を受け入れよ。②貴方がたは容易にそれを認めるであろう。③貴方がたが一の疑惑に取り囲まれているときに、貴方がたを確信づけてくれるものはそれらである。④貴方がたの本心が認めぬ事どもによって、徒らに自身を害われてはならない。

△二小段落V①不当の批評を恐れること勿れ。②それらは貴方がたの友人達をして立たしめるであろう。③それらは彼等に、貴方がたに対して寄せる共感(サバガイ)の思い起させ、彼等がその理由をよりよく識別するにつれて、一層断乎としてその共感を公表するであろう。

△三小段落V①もし貴方がたの才能が新しいものに属するなら、最初貴方がたは殆ど味方の数を算えることが出来ず、数多の敵をもつであろう。②失望してはならない。③前者(味方)が凱歌を奏するであろう。④なぜなら、彼等は何故に貴方がたを愛するか、その理由を知っているからであり、後者はなぜ貴方がたが厭わしいか知らぬからである。⑤前者は真実のために情熱を燃やして、不断に新しい仲間を加え、他方は己れの誤った意見の故に、なんら持続的な熱意を示すことがない。⑥前者は強固であり、後者は風のまにまにその向きを変える。⑦真実の勝利は確実である。

△四小段落V①世俗的な、或は略的な関係を結ぶために、貴方がたの時間を失ってはならない。②貴方がたは多くの同僚達が策動によって名誉へ、或は幸運へと到達するのを眺めるで

あろう。③それは真の芸術家ではないのである。④しかも彼等の或者は極めて聰明であり、もし貴方がたが彼等の領域で闘おうとするならば、貴方がたは彼等自身と同等の時間を、つまり貴方がたの全生涯を瀆辱することになる。⑤もはや貴方がたには芸術家になろうとする一分時すらも残されぬであろう。

この文章は大きっぱに読んでも、第一小段落は正しい批評、第二小段落は不当な批評についてのべてあることは理解できる。そこに注目して、正しい批評、不当な批評を軸として、対照的に論旨をつかんでみたい。

△第一小段落V① 正しい批評を受け入れよ。(||命令)||

△第二小段落V① 不当の批評を恐れること勿れ。(||禁止)||

②……Aを……であろう。(||推量)||

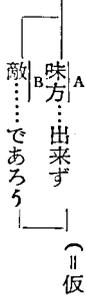
③Bは……であろう。(||推量)||

Aの意義) ↓ ④貴方がたの本心が認めぬことども  
前文の理由)

……てはならない。(||禁止)||

この要請↓推量↓説明の論旨の展開は、第三小段落、第四小段落でも用いられている。

△第三小段落V①もし……なら、



定された状況における推量) ↓ ②失望してはならない。(||①の状況



内容

10 真実

11 真実

12 誠実

13 美しい対象

14 人間であること

15 批評

16 使命を愛す

17 誠実の教訓

18 率直

生きることとの関係

こうした構成について考えることをしないとロダンの「遺言」は受けとり方が散漫なものとならう。

三 指導計画をどうするか

この「遺言」は55年度と56年度とともに三年生の教材としてあつかっている。その時の指導目標、指導過程は大差がないので、56年度のものを示しておく、次のとおりである。

ロダンの遺言 古川達雄訳

三省堂 新国語(三訂)文学三単元Ⅳ・56年度第三学年第一単元

「芸術の世界」

B (単元は教科書どおりでなく、自分で組みなおした)

指導目標

- 1、ロダンの芸術に対する考え方をつかむ。
- 2、指示語に注意する。

3、各文章の要旨をつかむ。

4、ひとつの文章を選び作文を書く。

指導過程

1、各文章に題をつけ、提出。

2、各文章の説明。文章によっては問題を解決しながら、理解

する。

3、参考として高村光太郎「車中のロダン」をよむ。

4、ひとつの文章を選んで感想を書く。

この指導目標・指導過程で気がつくことは、この「遺言」を統一体としてとらえていないことである。そこから、指導目標の2、

3、4、指導過程の1、2、4、が生まれている。こうした過去の

実践が今後の実践の中で生きるとすれば、次の三点である。

1、各文章に題をつける→これはさまざまであった。生徒の要旨のとらえ方をさぐることができた。

2、各文章の設問→あつかいにくいので、問題を作って学習活動をすすめた。これは有効だったと思う。

3、作文→ひとつの文章を選んで感想文を書かせたが、この感想文は内容の豊かな、真剣に考えたものが多かった。ロダンの思想の豊かさ、鋭さであろう。

こうした過去の実践をふまえて、指導目標、学習活動を考えてみたい。

まず、指導目標であるが、この「遺言」は第三学年の教材として採録されているものが多いので、そういった点も頭に入れて、次のようにしたい。

- 1、比喩・例証、文末などに注意して読む。

2、各文章の要旨をとらえる。

3、A遺言Vの構成をとらえる。

4、ロダンのものの見方、考え方を理解する。

の四つの指導目標をおきたい。1は指示語よりもここにあげたものが指導目標としてふさわしい。56年度には、比喩・例証、文末は論説文の読解指導体系の一つとしてははっきり意識になかった。教材の特異性B、イの具体的な形がこの1である。2は同じくB、イの具体的な形である。3はBのロである。こうして見ると、短かい文章の集まったものであるという特異性が指導目標の設定に一番大きい力を持っていたわけである。4は芸術の理解そのものよりも、こうした点の方が重要と考えた。芸術論を国語であつかうのも、もの見方、考え方を練るためであるから。

次に、学習活動としては、

1、各文章を比喩・例証、文末などに注意して要旨をとらえる。

2、各文章にみられるロダンのもの見方考え方の特色を理解する。

3、A遺言Vの構成を話しあう。

4、感想文を書く。

1は指導目標1、2から生まれたものである。その具体的方法は二の本文をどう読みとるか、でのべた。2は各文章ごとにまず理解する必要がある。それぞれの文章に考えさせられる点がある。リルケ「ロダン」や、世界美術全集、高村光太郎「車中のロダン」など役に立とう。3はかなり意見がわかれるのではないかと思う。4は単なる書き流しではなくて、構成の整ったものとするために、とりあげた理由↓内容の紹介↓自分の考え↓むすび、といった形をきめ

て書かせるのも一方法である。

以上、Aロダンの遺言Vをとりあげて、論説文教材の教材研究の考え方、方法、などについて考えてみた。過去の実践記録やカードに残っている教材研究の記録をみながら、いまさらのごとくその粗雑さにあきれている次第である。教材研究には終わりがないとまたしても思う。

#### 参考文献

ポール・グセル  
古川達雄訳

ポール・グセル  
内藤濯訳

リルケ  
ロダン(現代世界文学全集6) 新潮社

菊池一雄  
ロダン(現代世界美術全集彫刻篇)(河出書房)

伊藤信吉編  
高村光太郎詩集 新潮文庫

土井忠生編修  
新国語(三訂版) | 教授用参考資料 | 三省堂 |

62・10・26

(広島県三原高等学校教諭)